



○生育状況を見て追肥、倒伏軽減を検討しましょう！

生育の早いほ場で 幼穂形成期に入りました。その他のほ場でも平年より10日ほど早く幼穂形成期になると予想されます。

本年の起生期追肥は、過繁茂状態で、起生期より半月ほど経過（やや茎数が落ち着いた頃）してからの実施が多くみられました。しかし、依然として茎数は多い傾向にあります（表1）。生育に応じた追肥を実施してください（表2）。

茎数が多く、葉色が濃いなど明らかに倒伏すると判断される場合、植物成長調整剤の使用（表3）を検討しましょう（平年の幼穂形成期：4月30日、止葉期：5月25日、出穂始：6月1日）。

表1 参考：令和2年春の秋まき小麦生育状況（令和2年4月17日調査）

地区	畦幅(cm)	茎数/m ²	草丈(cm)	備考
JA今金エリア	12.5～18.0	2,169	14.5	5ほ場平均
JAきたひやまエリア	12.5～18.0	2,285	18.4	5ほ場平均
JA新はこだて若松基幹支店エリア	12.5～18.0	1,578	15.5	2ほ場平均

表2 時期別窒素施肥例（幼穂形成期茎数が1000～1500本/m²の場合）

生育期節	起生期	幼穂形成期	止葉期
平年値	4月6日	4月30日	5月25日
本年	3月17日	4月18日	-
窒素成分 (kg/10a)	0～2	2～4	4

※ 過剰な施肥は倒伏の恐れがあるので注意しましょう。

表3 倒伏軽減に向けた植物成長調整剤の使用例

薬剤使用例

薬剤名	系統名	使用量 (/10a)	使用時期	使用回数
サイコセルPRO	クロルメコート	150～200ml	幼穂形成期	1回
		200～300ml	出穂前20～10日 (草丈約40～60cm)	1回
カルタイム フロアブル	プロヘキサジオン	150～200ml	止葉期～出穂始期	1回
エスレル10	エテホン	300～500倍 (333～200ml)	止葉期～出穂始期	1回

※サイコセルPROは、2回以内（幼穂形成期は1回以内、幼穂形成期後は1回以内）の総使用回数となります。

①サイコセルPRO

散布時期が遅れると効果が劣る。

散布直後に降雨があっても再散布は行わない。

高温時の散布で薬害を生じることがあるので、晴天の日は日中を避け夕方に散布する。

②カルタイムフロアブル

伸長を過度に抑制させないために、必ず所定の使用量、使用時期を厳守し、多量散布や重複散布にならないように注意する。

展着剤は加用しない。

また、参考としてシルバキュア、チルト乳剤、アミスター20フロアブル、アドマイヤー顆粒水和剤、エルサン乳剤等と混用する事例では問題はなかったとの使用例がありますが、積極的に進めるものではありません。混用については、関係機関と相談して下さい。

尿素との混用は避ける。

③エスレル10

30%以上の出穂をみてからでは倒伏軽減効果が劣る場合があるので適期に処理する。

④一部の植物成長調整剤（サイコセルPRO, エスレル10）は他剤と混用せず、除草剤散布との間隔もあける。

**●追肥量の判断がつかない場合は普及センター、
関係機関へご相談ください。**

○●安全第一で農作業を行いましょう！！●○